外務大臣賞

大河の一滴

学校法人文化長野学園　文化学園長野高等学校　１年　細井　美愛

廃油二十ミリリットルを川に流すと、魚が住める水質に戻すためには、バスタブ二十杯分の水が必要になる。合成洗剤に含まれているパーム油の生産には、珊瑚やオランウータンの死滅や、児童労働が伴っている。……その事実を知っているのは世界の何パーセントの人なのだろう。こんなふうに、私が地球規模で物事を考えるようになったのは、つい最近のことだ。

私の通う学校は、ユネスコスクールの認可を受けた中高一貫校である。昨年私は中学の生徒会長になり、活動の中心としてＳＤＧｓの環境プロジェクトを企画することになった。私の住む長野県は豊かな自然に恵まれ、一見環境問題とは無縁である。課題が見えにくい私たちに、何ができるだろうかーー。

そんな時、海洋ごみが、実は山から運ばれていることを知った。「海の豊かさを源流から守る」。そうスローガンを決めて、廃油から石鹸を作るプロジェクトを立ち上げた。

いざ製作に取り掛かってみると、問題だらけだった。廃油石鹸は、製作にとても手間がかかった。しかも、廃油独特の匂いが完全には消えず、好んで使う人がどのぐらいいるのかも不安だった。

また、道具の洗浄や清掃に大量の水と洗剤を使用するという矛盾も目の当たりにした。モノづくりとは、ただそれだけで環境に負荷をかけるものなのだと、はっとさせられた。

廃油石鹸が合成洗剤よりも環境負荷が低いことは、自分たちで水質調査を行い検証していたが、負荷はゼロではない。使えば使うほど水を汚すのは明らかであり、人の営みの罪深さに心が痛んだ。私は、この廃油石鹸を、自信をもって広めていいのか悩んだ。

人間は科学を用いて便利さを追求してきた。より多くの製品を売りたいがために、消費者の心をつかむ便利さに固執した。その結果、持続可能性からは遠のいてしまっているのが今の地球である。便利さと環境保全を天秤にかけた時、人間はなぜ便利さを取ってしまうのだろう。これから先、未来永劫そんなアンバランスな天秤のままでいいのだろうか。地球からの大いなる恵みを奪い合い、分け与えられない人がいることを想像せず、自分の利益のことだけをいつも考えている。そうやって地球は本来の姿を失いつつあるのだ。

地球規模の課題に向き合うほど、私は自分の力の小ささを実感してしまい、どうしたらよいのかさらに分からなくなった。それでも、一歩ずつ進むしかない。一緒に活動をしていた仲間と相談し、まずは現状をどう周囲に伝えていくかを考えた。

学校でプレゼンをすると、興味をもって質問してきてくれる人、製作に協力してくれる人が現れ、徐々に仲間が増えていった。文化祭や地域のイベントに出店すると、多くの方が足を止め、私の話に耳を傾けてくれた。やがて、活動を知ったテレビ局や新聞社が、私たちを取材してくれるようになり、大きな団体から大量の注文をいただいたこともあった。一人で悩み苦しんでいたことが嘘のように、試行錯誤する仲間が増えていき、さらなる活動の支えになっていった。

「廃油石鹸プロジェクト」を通し、ほんの少し人の意識を変えることで、世界は変わるのではないかと感じるようになった。もしかしたらこの活動は、あらゆる課題が直面する「世界の縮図」だったのではないかーー。

貧困、飢餓、戦争、差別……。世界には、簡単には解決できない課題がたくさんある。それでも、現状を知った人が周囲に伝え、興味を持つ人が増え、やがて同じ課題に向かって沢山の人が動き、大きなうねりとなる。

大河が一滴の水から始まるように、大きな流れも小さなアクションがなければ始まらない。私が今できることは、この最初の一滴として、合流してきた仲間とともに、最後まで流れ続けること。多くの人を巻き込みながら、未来の世代に豊かな地球を残したい。